

# 『解深密経』における菩薩十地の梵文資料

——『瑜伽論』「摂決摂分」のカトマンドゥ断片より——

松 田 和 信 \*

## まえがき

前世紀の末、カトマンドゥのデュルバル・ライブラリー (Durbar Library) を訪ねた英国の梵語学者セシル・ベンドール (Cecil Bendall, 1856-1907) は、そこにあった王室コレクションを調査し、その中に、仏教文献であって、しかも後期グプタ文字からギルギット・バーミヤーン・タイプII文字に至る、十世紀前に遡る古書体で書かれた種々の貝葉写本断簡類を発見した。これらのベンドール調査写本は、その後、非仏教文献も含めて、同ライブラリーでひとまとめにされて 'Bendall's Puka' と呼ばれることになるが<sup>1)</sup>、その一部はベンドール自身、およびベンドールの死後、写本の写真を譲り受けた友人のラ・ヴァレー・プサン (Louis de La Vallée Poussin, 1869-1938)、あるいは独自にカトマンドゥで写本を見たシルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi, 1863-1935) 等によって若干の写本が出版されたものの<sup>2)</sup>、他の貴重な文献はなぜか忘れ去られ、その後写本が移管された同じカトマンドゥの国立公文書館 (National Archives) の中で眠ったままになっていた。インド仏教の原典研究を志す者の一人として、筆者もベンドール写本に関心を持ち、ベンドールという文献学の息吹きに触れた後も、なおカトマンドゥで人知れず百年近い歳月を過ごしたこれらの写本をマイクロ・フィル

\* 佛教大学総合研究所専任研究員 (助教授)

- 1) H. P. Śāstri, *A Catalogue of Palm-Leaf & Selected Paper Mss. Belonging to the Durbar Library, Nepal*, Vol. II (Calcutta, 1915) pp. 246-248. 本カタログは第1巻と合冊され、R. Grünendahl 氏が作成した Nepal-German Manuscript Preservation Project のマイクロフィルムとの対応一覧表が付されて、ドイツで復刊された。Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 31, (Stuttgart, 1989).
- 2) 一世紀近く前のことであるので追跡困難ではあるが、拙稿「ネパール系古層写本の新比定」『印度学仏教学研究』39巻1号 (1990) pp. (116)-(120) の中にベンドール写本をめぐる当時の報告、および研究・出版にかんする参考文献で、筆者に蒐集できたものを挙げておいたので参照していただきたい。

ムで取り寄せ、正体の判明したものから順次その報告を発表しつつある<sup>3)</sup>。

ベンドール調査写本中には、もはやそのオリジナルは失われていたと思われていた貴重なテキストの断片類が数多く含まれるが、その中に、国立公文書館で‘Ms. No. I-1697 Vi Bauddhadarśana 64 Ka’の番号が付された非常に興味深い写本セットが残されている<sup>4)</sup>。この写本セットは、ひとつのテキストを書き写した写本ではなく、それぞれ内容もサイズも全く異なる八葉の貝葉写本断片一葉ずつで構成されている。恐らくはそれぞれが属していた写本からこぼれ落ちて端本となった古い貝葉をただ寄せ集めただけと思われる。この八葉のうち、現在学界に知られているのは、ベンドールによる六葉目の『比丘尼律』の断片 (*Bhikṣuṇī-karmavācānā*) の出版のみであったが<sup>5)</sup>、筆者は残された七葉を、新たに(1)『瑜伽師地論 (*Yogācārabhūmi*, 瑜伽論)』の「摂決摂分 (*Viniścayasamgrahaṇī*)」(2)『法華経 (*Saddharma puṇḍarīka-sūtra*)』第一章 (3)ダルマキールティの『知識論決摂 (*Pramāṇaviniścaya*)』第三章 (4)未知の『俱舍論 (*Abhidharmakośa-bhāṣya*)』注釈書 (5)シャンカラに帰せられる『ガウダパーダ頌釈 (*Gaudapādīyakārikā-bhāṣya*)』<sup>6)</sup> (7)『十万頌般若経 (*Śatasāhasrikā Prajñā-pāramitā*)』(8)『瑜伽師地論』の「摂異門分 (*Paryāyasamgrahaṇī*)」に比定した<sup>7)</sup>。筆者によってこれら新たに確認された断簡のうち、『法華経』『知識論決摂』『瑜伽師地論』『摂異門分』の三種の断簡についてはすでに出版したので<sup>8)</sup>、残された重要写本は、最

3) マイクロフィルム入手の時点で筆者が新たに見出した文献については、その一覧を前掲拙稿に示しておいた。その後の筆者の発表については本稿注8参照。

4) この写本セットは前掲『シャーストリ目録』(注1参照)の‘Bendall’s Puka’の項に掲げられていないが、その後、国立公文書館が出版した仏教写本カタログには掲載されている。*Bṛhatsūcīpatram—Bauddhaviṣayaka—* (Kathmandu, 1964-1966) vol. VII, part 2, p. 77 参照。この写本セットが‘Bauddhaśāstrīyapattrāṇi’ (仏教論書の残葉集)なる暫定的なタイトルで、書体は Licchavilipi (リッチャヴィー文字=ネパールでいうグプタ文字のこと) および Pracina Nevārīlipi (初期ネパール文字)、サイズ20×2インチ、等の情報とともに掲載されている。なお、このサイズは8葉のうちどれを測ったのか不明。内容についての記載はないが、注記に8葉のうち1葉が *Samdhinirmocana* であることが指摘されている！これは本稿で取り上げる1葉を指すが、表4行目(本稿のローマ転写の項参照)に現れる「摂決摂分」の記述に基づいたものと思われる。

5) C. Bendall, “Fragment of a Buddhist Ordination-Ritual in Sanskrit”, *Album-Kern* (Leiden, 1903) pp. 373-376.

6) 前掲注4に紹介した国立公文書館のカタログにあるように、8葉はすべて10世紀を下ることのない古い書体で書かれているが、この一葉のみ一般的なネワリー体で書写されている。仏教以外の文献が1葉だけなぜここにまぎれこんでいるのか不明。

7) 筆者は Nepal/German Manuscript Preservation Project の撮影したマイクロフィルム (Reel No. A39/3, 1970年3月撮影) を使用しているが、この8葉の順序は単にマイクロフィルムに写っている順序であって、何らかの内容的、あるいは年代的な順序を考慮して並べたのではない。8葉の既存文献との対応箇所については、次注8に示す『知識論決摂』断簡にかんする拙稿 (*WZKS*, Band 35) pp. 140-141を参照していただきたい。

8) 『法華経』断簡については、この写本セット以外の断片と併せて徳島大学の戸田宏文教授と共同で出版した “Three Sanskrit Fragments of the Saddharma puṇḍarīkasūtra”

初の『瑜伽論』『撰決択分』の断簡ということになる。この一葉は、「撰決択分」が『解深密経 (Samdhinirmocana-sūtra)』を本文として取り込む箇所に対応するが、その中の大部分を占める菩薩十地に関する記述を断簡中より取り出してテキストを再構成し、和訳とともに提示することが本稿の目的である。

## 1. 『瑜伽論』の梵文写本について

『瑜伽師地論』を構成する「本地」「撰決択」「撰釈」「撰異門」「撰事」の五分門のうち、梵文写本の存在が知られているのは、現在まではラーフラ・サーンクリトヤーナ (Rāhula Sāṅkrītyāyana) によってチベットのサキヤとシャルの僧院で写真撮影され、かつ一部は筆写された、いわゆるラーフラ・コレクションに含まれる「本地分」関係の写本数本<sup>9)</sup>、および筆者によって見い出されたサンクト・ペテルブルグ (旧レーニングラード) にある「撰決択分」の一部分に限られていたが<sup>10)</sup>、上記のように「撰異門分」の一葉がこれに加えられ、本稿でさらにサンクト・ペテルブルグ写本とは別に、

、 from the Cecil Bendall Manuscript Collection in the National Archives, Kathmandu”, 『徳島大学教養部倫理学科紀要』No. 20, 1991, pp. 21-35. 『知識論決択』断簡についてはウィーン大学のシュタインケルナー教授 (E. Steinkellner) と共同で出版した “The Sanskrit Manuscript of Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Report on a Single Folio Fragment from the National Archives Collection, Kathmandu”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band 35 (1991), pp. 139-149. および「撰異門分」断簡については拙稿『『瑜伽論』『撰異門分』の梵文断簡』『印度哲学仏教学』第9号, 1994 (近刊) を参照していただきたい。

- 9) サキヤで発見された写本は「本地分」全体を含む単一写本ではなく「声聞地」と「菩薩地」を欠く。シャルで発見された「声聞地 (一部の重複部分を含む)」と「菩薩地」の単独写本はサキヤ寺写本とはサイズも書体も異なる別写本である。この「声聞地」写本は1994年秋、モノクローム及びカラー原寸影印版により中国と大正大学共同で出版された。シャル寺写本とともに北京の民族文化宮に保存されていたことが謄写版刷りの同宮所蔵写本リスト (一般には非公開のもの) から確認できるが、現在もそこにあるかどうかは不明。サキヤ寺写本は同リストにはなく、その所在は明らかでない。なお「菩薩地」についてはカトマンドゥ、ケンブリッジ、京都大学等のコレクションにも含まれている。これらの現在までに知られる写本の詳細と、それらに基づくテキスト校訂、出版については、菅原泰典氏作成の解題 (『梵語仏典の研究』(III) 一論書篇—pp. 318-329) に詳しい。なお最近、ゲッティンゲン大学に保存されているラーフラ・コレクションの写真に対する詳細なカタログが出版された。Frank Bandurski, “Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkrītyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, III)”, *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 5) Göttingen, 1994, pp. 9-126.

- 10) 漢訳 (玄奘訳) 卷五十三、五十四のはほぼ全体に対応する断簡十二葉。グライラマ十三世より当時のロシア皇帝ニコライ二世に贈られたもの。この断簡中に言及されることにより「本地分」の原語が *Mauli bhūmi* であることが初めて確認できた。拙稿「グライラマ13世寄贈の一連のネパール系写本について—『瑜伽論』撰決択分梵文断簡発見記—」『日本西蔵学会会々報』34号 (1988) pp. 16-20参照。

新たな「摂決摂分」の断簡一葉が追加されることになる。

ここで取り上げる一葉の内容は、「摂決摂分」において『解深密経』が本文として引き写される箇所のうち、同経のチベット語訳第八章「マイトレーヤの章」(玄奘訳「分別瑜伽品」)末尾の重頌の直前より、第九章「アヴァローキテーシュヴァラの章」(同「地波羅蜜多品」)の前半部に対応する<sup>11)</sup>。本葉の中で「摂決摂分」独自の文章といえば『解深密経』第九章に相当する部分の導入ための一文だけにすぎない。従って本葉は、本来は『瑜伽論』「摂決摂分」の断簡に他ならないのではあるが、実質的には『解深密経』の断簡であると考えても差し支えない。本葉は『解深密経』の二つの章にまたがるが、第八章「マイトレーヤの章」に対応する部分は別の機会に譲り、本稿では、ある程度のまとまった文章が回収される第九章に対応する部分についてテキストと和訳を提供することとしたい。なお『解深密経』についても、その梵文原典はすでに失われ、わずかに他の文献中の引用を通してしか、そのオリジナルに触れることができなかった。本稿に提示されるテキストは、『解深密経』自体にとっても、相当量の梵文テキストの初めての回収ということになる<sup>12)</sup>。

## 2. ローマ字転写

まずカトマンドウの「摂決摂分」断簡のローマ字転写を示す。写本の外観については本稿に付した写真を参照していただきたいが、この一葉はギルギット・バーミヤン・タイプII文字で貝葉の表 (recto) に10行、裏 (verso) に9行書かれた巨大な断簡である(マイクロフィルムを見ているだけなので実際のサイズは不明)。ただし両端が破損し、筆者の計算によると、すべての行の冒頭4ないし7音節ほどが失われ、さらに行末についても、ほとんどの行の1ないし2音節が失われている。従って欄外に書かれ

11) 本葉がカバーするのは、「摂決摂分」では、玄奘訳、大正 vol. 30, 728c<sup>16</sup>-730b<sup>21</sup>, チベット語訳 P. ed., Hi 87b<sup>7</sup>-92a<sup>3</sup>の範囲、および『解深密経』では、玄奘訳、大正 vol. 16, 703a<sup>14</sup>-704c<sup>20</sup>, チベット語訳 P. ed., Nu 42a<sup>5</sup>-46a<sup>1</sup>, Lamotte ed., VIII §39-IX §6の範囲である。

12) ほんのわずかな断片ではあるが、実は『解深密経』自体の梵文写本は存在する。これも筆者の発見によるものであるが、ベルリンにあるドイツ探検隊将来のトゥルファン・コレクション中に見い出されたものである (Nr. 923)。拙稿「Vasubandhuにおける三帰依の規定とその応用」『仏教学セミナー』第39号 (1984) p. 81, 付記2参照。この断片は、玄奘訳の勝義諦相品、あるいはチベット語訳第二章から第三章にかけて対応箇所を持つが、中央アジアにおけるインド系文字の変遷についての権威、ベルリン・インド博物館のL. ザンダー博士 (Lore Sander) によると、インドより中央アジアにもたらされた、5世紀に遡る、驚くべき古さの写本である。cf. Lore Sander, "The Earliest Manuscript from Central Asia and Sarvāstivāda Mission", *Corolla Iranica*, ed. by R. E. Emmerick & D. Weber (Frankfurt am Main, 1991) pp. 133-150.

ていたはずの葉番号 (Folio Number) も欠落している。内容的には、表四行目の中程で『解深密経』第八章に相当する部分が終わる、つづいて「撰決撰分」自体の一文をはさんで第九章が始まるが、以下のローマ字転写は表四行目より最後までをカバーしている。なおローマ字転写にあたっては、次の記号を用いて写本の現状を伝えることに努めた。

[ ] 破損しているが解読可能な文字； .. 破損により解読不能な文字； ( ) 筆者により任意に補われた文字； { } 一度書かれた後、書写生自身によって消去された、あるいは誤写された、あるいは正規の梵語としては不要な文字； + 失われた文字；  
 /// 写本の破れ目；, / // daṇḍa ; (!)sic ; \*virāma.

### Kathmandu Fragment Transcribed

recto

4 /// + + + mahāyogamanasikāraṃ pratilambho 'bhūt // o // yānaprasthānavyavasthānam ārabhya yathāvadyānavibhāganirdeśo veditavyaḥ (/) tad yathā sandhinirmocane sūtre / avalokiteśvaro bodhisatvo bhagavantam praśnam adrākṣīt\* (/) yā imā bhagavan bodhisatvānām daśa bhūmayaḥ tad yathā pramuditā ca nāma bhūmiḥ(,) vimalā, prabhākari, ar{c}ciṣmatī, sudurjayā, abhimukhī, dūraṃgamā, acalā, sādhumatī, dharmameghā ca, buddhabhūmiś caikādaśamā i(ti)

5 /// + + + katibhir viśuddhibhiḥ saṃgraho bhavati, katibhiś cāṃgaiḥ (//) bhagavān āha / catasṛbhir avalokiteśvara viśuddhibhir ekādaśabhiś cāṃgair etā{m}sām bhūmīnām saṃgraho veditavyaḥ (/) tatrāvalokiteśvera āśayaviśu(d)dhyā prathamā bhūmiḥ saṃgrhītā{h} (/) adhiśilaviśuddhyā dvitīyā bhūmiḥ (/) adhicitaviśu(d)dhyā tṛtīyā bhūmiḥ (/) adhiprajñāviśu(d)dhyā uttarottaraprāṇī-tataratayā caturthīm bhūmim upādāya yāvad buddhabhūmeḥ saṃgraho veditavyaḥ (/) ābhiś catasṛbhi(r vi)

6 /// + + + bhūmīnām saṃgraho bhavati (//) ka(tamair ekā)daśabhir aṃgaiḥ (/) adhimukticaryābhūmau avalokiteśvara daśasu dharmacariteṣu{,} suparibhāvitādhimuktikṣāntir bodhisatvaḥ tām ca bhūmim atikramya bodhisatvacaryā-samatikrāmatī(!) / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti sūkṣmā-pattiskhalitasamudācāreṣu saṃprajānacārī bhavitum, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti laukikaṃ

7 /// + samāpattum, paripūrṇam ca śrutadhāraṇīm pratilabdhum(,) sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchati, tac cādhigacchati(,) sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na ca(!) śaknoti yathāpratilabdhair bodhipakṣyair dharmais tadba-

hulavihārī bhāvayituṃ(.) samāpattidharmatrṣṇāyāś ca{.,} cittam adhyupekṣi{p-}tuṃ, sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchati, tac cādhigacchati / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na ca(!) śaknoti satyāni vyavacāraṇāya saṃsāra

8 ///. . . r ekāṃtavimukhābhimukhaṃ manaskāram adhyupekṣya {sa} upāyaparigrhītān bodhipakṣyān dharmāṃ bhāvayituṃ, sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati(.), na tu śaknoti saṃskārapravṛttiṃ yathāvatpratyakṣikṛtya tannirvidba-  
{la}hulatayā animittanāmanasikāreṇa bahulaṃ vihartuṃ(.) sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati(.), sa tasyāṃgasyāparipūraye(!){.,} vyāyacchate(.), tac cādhigacchati / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati[, na tu] śaknoti nicchidra(!)niramtaraṃ animittanāmanasikāre

9 /// [laṃ] vihartuṃ, sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchate, sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti tasmin nimittavihāre(!) ābhogam adhyupekṣituṃ {ca} nimittavaśītāṃ cānuprāptuṃ(.) sa tenāṃgena paripūrṇo(!) bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti, paryāyalakṣaṇanirvacana

10 prabhedasarvaprakāradharmadeśanāyā vaśītāṃ pratilabdhuṃ, sa tenāṃgena paripūrṇo(!) bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati (/) sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati(.), na tu śaknoti paripūrṇaṃ dharmakāyaṃ pratisaṃvedayituṃ,

verso

1 /// na paripūrṇo(!) bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati / sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti sarvasmin\* jñeye asaṃgapratihatāṃ(!) (jñāna)darśanaṃ pratilabdhuṃ(.) sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati, sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūrṇatvāt sarvāṃgaparipūrṇo bhavati / ebhir avalokiteśvara ekādaśabhir aṃgai

2 /// mīnāṃ saṃgraho veditavyaḥ (//) kena kāraṇena bhagavan prathamā bhūmiḥ pramuditety ucyate, kena kāraṇena yāvad buddhabhūmir ity ucyate, mahārtha-anucitalokottaracittalābha-udāraprītiprāmodyatām upādāya prathamā bhūmi(h) pramuditety ucyate / sarvasūkṣmāpatti{h}dauṣṭhulyamalavigatām upādāya{h} dvitīyā vimalety ucyate / apramāṇajñānāvabhāseṇa sannīśrayatām upādāya tasya samādhes tasyāś ca śrutadhāraṇyās tṛtīyā bhūmiḥ prabhākarīty ucyate / klēśadahanāya jñānā

3 /// [bhū]tatvāt tasya(!) bodhipakṣyadharmabhāvanā[yā]ś caturthī bhūmir ar-







{c}ciṣmatīty ucyate / teṣām eva bodhipakṣyāṇām dharmāṇām tasya(!) upāya-bhāvanāyāḥ kṛcchreṇa vaśavar{t}tanatām upādāya pañcamī bhūmiḥ sudur-jayety ucyate / saṃskārānupravṛtteḥ pratyakṣibhāvanām animittabahu-lamanasikārāmukhatām copādāya ṣaṣṭhī bhūmir abhimukhīty ucyate (/) nicchi-dra(!)nirantarānimittamanasikāre dūrānupraveśaṃ viśuddhabhūmyanuśleṣatām copādāya saptamī bhūmir dūraṃgamety ucyate / animitte anābhogātām nimitta

4 /// [mu]dācārāvicālyatām copādāya a[ṣṭa]mī bhūmir acalety ucyate (/) sarvaprakāradharmadeśanāvaśītām anavadyaṃ mativaipulyalābham upādāya navamī bhūmiḥ sādhumatīty ucyate (/) nabhopamasya dauṣṭhulyakāyasya mahāmeghopamena dharmakāyena spharaṇāc chādanatām upādāya daśamī bhūmir {d}dharmameghety ucyate (/) susūkṣmakleśajñeyāvaraṇaprahānād asaṃ-gāpratihatajñeyasarvākārābhisam̐bodhim upādāya ekādaśamī bhūmir buddha-bhūmir ity ucyate // āsāṃ bhagavan bhūmīnām katisaṃmohaḥ(h)

5 /// ṣṭhulyāni vipakṣaḥ (/) bhagavān āha / dvāviṃ[śatir avalo]kiteśvara saṃ-moha ekādaśa dauṣṭhulyāni vipakṣaḥ (/) prathamāyā bhūmeḥ pudgaladharmā-bhiniveśasaṃmohaḥ āpāyikaṣaṃkleśa{h}saṃmoha(s tad)dauṣṭhulyaṃ ca vipa-kṣaḥ (/) dvitīyāyāḥ sūkṣmāpattiskhalitasam̐moha(ś) citrākārakarmagatisaṃ-mohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) tṛtīyāyāḥ kāmarāgasam̐mohaḥ pratipūr-ṇaśrutadhāraṇīsaṃmo{ma}has taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaś (/) caturthyāḥ samāpattitṛṣṇāsaṃmohaḥ dharmatrṣṇāsaṃmohaḥ (tad)dauṣṭhulyaṃ ca

6 /// pañcamyāḥ saṃsāraikāntavimukhatā(bhimukhatā)manaskārasaṃmoho nir-{v}vāṇaikāntavimukhatābhimukhatāmanaskārasaṃmohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) ṣaṣṭhyā(h) saṃskārānupravṛttipratyakṣasaṃmoho nimittaba-hulasamudācārasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca {,} vipakṣaḥ (/) saptamyāḥ sūkṣ-manimittasamudācārasaṃmohaḥ ekāntānimittamanasikāropāyasaṃmohaḥ tad-dauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) aṣṭamyā animi[ttābho]gasam̐mohaḥ nimitteṣu ca vaśītasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) navamyā apa[ri]

7 /// dharmadeśanāyāṃ aparimāṇe {aparimāṇe} dharmapadavyaṃjane utta-rottare ca prajñāpratibhāne dhāraṇīvaśītasaṃmohaḥ pratibhānavaśītasaṃmohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) daśamyā mahābhijñāsaṃmohaḥ sūkṣmagu-hyānupraveśasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) buddhabhūmeḥ sarva-smin jñāye susūkṣmasaktisaṃmohaḥ pratighātaṣaṃmohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) ebhir avalokiteśvara dvāviṃsadbhiḥ saṃmohaiḥ ekādaśabhiś ca dau-ṣṭhulyair āsāṃ bhūmīnām vyavasthānaṃ bhavati (/) viśamyuktā ///

8 /// .. van yāvad mahānuśaṃsā mahāphalā anuttarā samyaksaṃbodhiḥ yatredānim evaṃ ma(hā)saṃmohajālaṃ saṃpracālya mahac ca dauṣṭhulyaga-hanaṃ samatikramya bodhisatvā anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisam̐budhya-

mte // āsām bhagavan bhūmīnām katibhir viśeṣair vyavasthānam bhavati (/)  
 aṣṭābhir avalokiteśvara adhyāśayaviśu(d)dhyā cittaviśu(d)dhyā karuṇāviśu(d)-  
 dhyā pāramitāviśu(d)dhyā buddhadarśanopasthānaviśu(d)dhyā satvapariṣāka-  
 viśu(d)dhyā (upapattiviśuddhyā) prabhāva ///

9 /// yām bhūmau {/} adhyāśayaviśuddhir yāvat prabhāyaviśuddhir yāvad  
 uttarottarā(su) bhūmiṣu yāvad buddhabhūmer adhyāśayaviśuddhir yāvat pra-  
 bhāyaviśuddhiḥ sā viśuddhatarā viśuddhatamā veditavyā (/) tatra buddhabhū-  
 māv upapattiviśuddhiṃ sthāpayitvā (/) ye ca prathamāyā(m) bhūmau guṇās tais  
 taduttarottarā bhūmayāḥ tadguṇasamāḥ svabhūmiguṇaviśiṣṭāś ca veditavyāḥ  
 (/) sarvāś ca daśabodhisatvabhūmayāḥ sottaraguṇāḥ (/) niruttaraguṇā{h}  
 buddha[bhū] ///

### 3. テキストの提示

『解深密經』第九章の前半部は『十地經 (*Daśabhūmika-sūtra*)』において確立され  
 た菩薩の修行の階梯を十段階に分けて示す十地思想、およびその結果としての仏陀の  
 段階(仏地)についての分類と解説をその内容とする。『解深密經』にかんする基本文  
 献としては、ラモット (Étienne Lamotte) によるチベット語訳校訂、およびそれに  
 基づくフランス語訳が広く参照されていると思われるので、上記ローマ字転写をラモ  
 ットによる第九章の校訂に従って分節し<sup>13)</sup>、さらに「摂決摂分」の玄奘訳とチベット語  
 訳、『解深密經』のチベット語訳、および、漢訳は玄奘訳『解深密經』の他にも、異訳  
 である菩提流支訳『深密解脫經』、さらに第九章のみに相当する求那跋陀羅訳『相續解  
 脫地波羅蜜了義經』の対応箇所をも参照して、写本の破損による欠落部分を補い、筆  
 者は以下のようにテキストを再構成した<sup>14)</sup>。従って、( )内の文字は写本には根拠が  
 なく、筆者がこれらの資料から推定したものである。なお、ローマ字転写において 'sic'  
 の記号を入れた箇所は訂正し、イタリックスで示した。また、ローマ字転写における  
 { }内の不要文字は削除した。写本に現れる語形をそのまま用いたこと、あるいは相

13) É. Lamotte, *Samdhinirmocana Sūtra : L'Explication des Mystères* (Louvain / Paris, 1935), pp. 122-130 & pp. 236-242. 各パラグラフのタイトルは、このラモットのフランス語訳に示される表題をそのまま用いた。

14) 以下のテキストに対応する「摂決摂分」玄奘訳は、大正 vol. 30, 729a<sup>15</sup>-730b<sup>21</sup>, チベット語訳 P. ed., Hi 88b<sup>2</sup>-92a<sup>3</sup>の範囲、および、玄奘訳『解深密經』大正 vol. 16, 703b<sup>11</sup>-704c<sup>20</sup>, 菩提流支訳『深密解脫經』大正 vol. 16, 680a<sup>18</sup>-681b<sup>3</sup>, 求那跋陀羅訳『相續解脫地波羅蜜了義經』大正 vol. 16, 714c<sup>15</sup>-715c<sup>8</sup>, チベット語訳 P. ed., Nu 42b<sup>7</sup>-46a<sup>1</sup>に対応する。

当数のダングを補ったこと等によりサンディ規則が一部乱れているが、訂正はしていない<sup>15)</sup>。

### Sanskrit Text Reconstructed

(r<sup>4</sup>) yānaprasthānavyavasthānam ārabhya yathāhvadyānavibhāganirdeśo  
veditavyaḥ (/) tad yathā sandhinirmocane sūtre /

§1. Les dix et la onzième Bhūmi.

avalokiteśvaro bodhisatvo bhagavantaṃ praśnam adrākṣit (/) yā imā bhagavan  
bodhisatvānāṃ daśa bhūmayāḥ (/) tad yathā (1) pramuditā ca nāma bhūmiḥ, (2)  
vimalā, (3) prabhākari, (4) arcīṣmatī, (5) sudurjayā, (6) abhimukhī, (7) dūraṃ-  
gamā, (8) acalā, (9) sādhumatī, (10) dharmameghā ca, buddhabhūmiś caikādaśamā  
i(ti / ) (r<sup>5</sup>) (etāsāṃ bhūmināṃ) katibhir viśuddhibhiḥ saṃgraho bhavati, katibhiś  
cāṃgaiḥ (/)

§2. Les quatre Viśuddhi.

bhagavān āha / catasṛbhir avalokiteśvara viśuddhibhir ekādaśabhiś cāṃgair  
etāsāṃ bhūmināṃ saṃgraho veditavyaḥ (/)

§2-1. tatrāvalokiteśvara āśayaviśu(d)dhyā prathamā bhūmiḥ saṃgrhītā (/)

§2-2. adhiśilaviśuddhyā dvitīyā bhūmiḥ (/) §2-3. adhicitaviśu(d)dhyā tṛtīyā bhūmiḥ  
(/) §2-4. adhiprajñāviśu(d)dhyā uttarottaraprāṇītataratayā caturthīm bhūmim  
upādāya yāvad buddhabhūmeḥ saṃgraho veditavyaḥ (/) ābhiś catasṛbhi(r vi-)(r<sup>6</sup>)  
(śuddhibhir etāsāṃ) bhūmināṃ saṃgraho bhavati (/)

§3. Les onze Aṅga.

ka(tamair ekā)daśabhir aṃgaiḥ (/)

§3-1. adhimuktīcaryābhūmau avalokiteśvara daśasu dharmacariteṣu supari-  
bhāvitādhimuktikṣāntir bodhisatvaḥ tāṃ ca bhūmim atikramya *bodhisatvasamya-*  
*ktvanyāṃmam avakrāmati*<sup>16)</sup> /

15) なおローマ字転写において { } に入れた r に続く子音の重複はここで削除したが、  
-satva などと写本に現れるものは -sattva に訂正せず、manaskāra / manasikāra の混用  
もそのまま放置した。

16) Ms. bodhisattvacaryāsamatikrāmati をこのように訂正した。書写生の誤写と見なすに  
はあまりにも相違が大きいが、他の資料はすべてこの訂正を支持する。例えば、「撰決撰分」  
玄奘訳では「證入菩薩正性離性 (729b<sup>3</sup>)」チベット語訳では byang chub sems paḥi yaṅ  
dag pa ṅid skyon med pa la ḥjug go (Lamotte ed., p. 123, ll. 2-3) とある。後注18で  
示す *First Bhāvanākrama* の対応箇所にも tadā bodhisattvaḥ samyaktvanyāṃmāvakrā-  
ntito, darśanamārgotpādāt, prathamāṃ bhūmim praviṣṭo bhavati (p. 224, ll. 19-21) と  
あってこの訂正と矛盾しない。

§3-2. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti sūksmāpattiskhalitasamudācāreṣu saṃprajānacārī bhavitum, (sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati,) sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati /

§3-3. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti laukikaṃ (r<sup>7</sup>) (samādhim paripūrṇaṃ) samāpattum, paripūrṇaṃ ca śrutadhāraṇīm pratilabdhum, (sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati,) sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchati, tac cādhigacchati (/)

§3-4. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti yathāpratilabdhair bodhipakṣyair dharmais tadbahulavihārī bhāvayitum, (sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati,) samāpattidharmatṛṣṇāyāś ca cittam adhyupekṣitum, sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchati, tac cādhigacchati /

§3-5. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti satyāni vyavacāraṇāya saṃsāra(r<sup>8</sup>)(nirvāṇayo)r ekāṃtavimukhābhimukhaṃ manaskāram adhyupekṣya upāyaparigṛhītān bodhipakṣyān dharmāṃ bhāvayitum, (sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchati, tac cādhigacchati)

§3-6. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti saṃskārapravṛttiṃ yathāvatpratyakṣikṛtya tannirvidbahulatayā animittamanasikāreṇa bahulaṃ vihartum, (sa tenāṃgena aparipūrṇo bhavati,) sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati /

§3-7. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti niśchidraniramtaraṃ animittamanasikāre(r<sup>9</sup>)(ṇa bahu)[laṃ] vihartum, sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchate /

§3-8. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti tasmin animittavihāre ābhogam adhyupekṣitum nimittavaśitāṃ cānuprāptum, (sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati /

§3-9. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti paryāyalakṣaṇanirvacana-(r<sup>10</sup>)prabhedasarvaprakāradharmadeśanāyā vaśitāṃ pratilabdhum, sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati (/)

§3-10. sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, na tu śaknoti paripūrṇaṃ dharmakāyaṃ pratisaṃvedayitum, (v<sup>1</sup>) (sa tenāṃge)nāparipūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati /

§3-11. sa tenāṃgena paripūraṇo bhavati, na tu śaknoti sarvasmin jñeye asaṃgāpratihatāṃ (jñāna)darśanaṃ pratilabdhum, (sa tenāṃgenāparipūrṇo bhavati,

sa tasyāṃgasya paripūraye vyāyacchate, tac cādhigacchati, sa tenāṃgena paripūrṇo bhavati, sa tasyāṃgasya paripūrṇatvāt sarvāṃgaparipūrṇo bhavati / ebhir avalokiteśvara ekādaśabhir aṃgai(v<sup>2</sup>)(r etāsāṃ bhū)mīnāṃ saṃgraho veditavyaḥ (//)

#### §4. Définition des Bhūmi.

kena kāraṇena bhagavan prathamā bhūmiḥ pramuditety ucyate, kena kāraṇena yāvad buddhabhūmir ity ucyate /

§ 4 - 1. mahārthānucitalokottaracittalābhodāraprītiprāmodyatām upādāya prathamā bhūmi(h) pramuditety ucyate / § 4 - 2. sarvasūkṣmāpattidauṣṭhulyamalavigatām upādāya dvitīyā vimalety ucyate / § 4 - 3. apramāṇajñānāvabhāsena sannīśrayatām upādāya tasya samādhes tasyāś ca śrutadhāraṇyās tṛtīyā bhūmiḥ prabhākarīty ucyate / § 4 - 4. kleśadahanāya jñānā(v<sup>3</sup>)(gnyarcir)[bhū]tātvāt *tasyā* bodhipakṣyadharmabhāvanā[yā]ś caturthī bhūmir arcīṣmatīty ucyate / § 4 - 5. teṣāṃ eva bodhipakṣyāṇāṃ dharmāṇāṃ *tasyā* upāyabhāvanāyāḥ kṛcchreṇa vaśavartanatām upādāya pañcamī bhūmiḥ sudurjayety ucyate / § 4 - 6. saṃskārānupravṛtṭeḥ pratyakṣībhāvanāṃ animittabahulamānasikārāmukhatām copādāya ṣaṣṭhī bhūmir abhimukhīty ucyate (/) § 4 - 7. *nīśchidranirantarānimittamanasikāre* dūrānupraveśaṃ viśuddhabhūmyanuśleṣatām copādāya saptamī bhūmir dūraṃgamety ucyate / § 4 - 8. animitte anābhogātām nimitta-(v<sup>4</sup>)(kleśasa)[mu]dācārāvicālyatām copādāya a[ṣṭa]mī bhūmir acalety ucyate (/) § 4 - 9. sarvaprakāradharmadeśanāvaśitam anavadyaṃ mativaipulyalābham upādāya navamī bhūmiḥ sādhumatīty ucyate (/) § 4 - 10. nabhopamasya dauṣṭhulyakāyasya mahāmeghopamena dharmakāyena spharaṇac chādanatām upādāya daśamī bhūmir dharmameghety ucyate (/) § 4 - 11. susūkṣmakleśajñeyāvaraṇaprahānād asaṃgāpratihatājñeyasarvākārābhisambodhim upādāya ekādaśamī bhūmir buddhabhūmir ity ucyate //

#### §5. Les vingt-deux Moha et les onze Dauṣṭhulya.

āsāṃ bhagavan bhūmīnāṃ katisaṃmohā(h) (v<sup>5</sup>) (katidau)ṣṭhulyāni vipakṣaḥ(/) bhagavān āha / dvāvīm[śatir avalo]kiteśvara saṃmohā ekādaśa dauṣṭhulyāni vipakṣaḥ (/)

§ 5 - 1. prathamāyā bhūmeḥ pudgaladharmābhīniveśasaṃmohaḥ āpāyikaṣaṃkleśasaṃmoha(s tad)dauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5 - 2. dvitīyāyāḥ sūkṣmāpattiskhalitasamāhā(ś) citrākārakarmagatisaṃmohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5 - 3. tṛtīyāyāḥ kāmarāgasamāhāḥ pratipūrṇaśrutadhāraṇīsamāhāḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaś (/) § 5 - 4. caturthīyāḥ samāpattitṛṣṇāsamāhāḥ dharmatṛṣṇāsamāhāḥ (tad)dauṣṭhulyaṃ ca (v<sup>6</sup>) (vipakṣaḥ /) § 5 - 5. pañcamīyāḥ saṃsāraikāntavimukhatāmanaskārasamāhāḥ nirvāṇaikāntābhimukhatāmanaskārasamāhāḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) § 5 - 6. ṣaṣṭhīyā(h) saṃskārānupravṛtṭipratyakṣasaṃmoho nimittabahulasamudācārasamāhāḥ taddau-

ṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) §5-7. saptamyāḥ sūkṣmanimittasamudācārasaṃmohaḥ ekāṃtānimittamanasikāropāyasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) §5-8. aṣṭamyā animi[ttābho]gasamṃmohaḥ nimitteṣu ca vaśitāsaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) §5-9. navamyā apa[ri](v<sup>7</sup>)(māṇa)dharmadeśanāyāṃ apari-māṇe dharmapadavyaṃjane uttarottare ca prajñāpratibhāne dhāraṇivaśitāsaṃmohaḥ pratibhānavaśitāsaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) §5-10. daśamyā mahābhijñāsaṃmohaḥ sūkṣmaguhyānupraveśasaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) §5-11. buddhabhūmeḥ sarvasmin jñāye susūkṣmasaktisaṃmohaḥ pratighātaṃsaṃmohaḥ taddauṣṭhulyaṃ ca vipakṣaḥ (/) ebhir avalokiteśvara dvāvimsadbhiḥ saṃmohaiḥ ekādaśabhiḥ ca dauṣṭhulyair āsāṃ bhūmīnāṃ vyavasthānaṃ bhavati (/) viśamyuktā(nutta)(v<sup>8</sup>)(rā samyaksaṃbodhiḥ /

(āścaryā bhaga)van yāvad mahānuśamsā mahāphalā anuttarā samyaksaṃbodhiḥ yatredānim evaṃ ma(hā)saṃmohajālaṃ saṃpracālya mahac ca dauṣṭhulyagahanāṃ samatikrāmya bodhisattvā anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambudhyaṃte //

#### §6. Les huit viśuddhi.

āsāṃ bhagavan bhūmīnāṃ katibhir viśeṣair vyavasthānaṃ bhavati (/) aṣṭābhir avalokiteśvara (1) adhyāśayaviśu(d)dhyā (2) cittaviśu(d)dhyā (3) karuṇāviśu(d)dhyā (4) pāramitāviśu(d)dhyā (5) buddhadarśanopasthānaviśu(d)dhyā (6) satvapariṣākaḥ viśu(d)dhyā (7) (upapattiviśuddhyā) (8) prabhāva(viśu)(v<sup>9</sup>)(ddhyā ca / yāvalokiteśvara prathamā)yāṃ bhūmau adhyāśayaviśuddhir yāvat prabhāvaviśuddhir yāvad uttarottarā(su) bhūmiṣu yāvad buddhabhūmer adhyāśayaviśuddhir yāvat prabhāvaviśuddhiḥ sā viśuddhatarā viśuddhatamā veditavyā (/) tatra buddhabhūmāv upapattiviśuddhiṃ sthāpayitvā (/) ye ca prathamāyā(ṃ) bhūmau guṇās tais taduttarottarā bhūmayāḥ tadguṇasamāḥ svabhūmiguṇaviśiṣṭāś ca veditavyāḥ (/) sarvāś ca daśabodhisattvabhūmayāḥ sōttaraguṇāḥ (/) niruttaraguṇā buddha[bhū](mīr veditavyā //

## 4. 試訳

乗に発心すること (yāna-prasthāna) についての取り決め (vyavasthāna) を主題として<sup>17)</sup>, 正しい (yathāvat) 乗を弁別 (vibhāga) するための説明を理解すべきであるが, そのことは『解深密経』に〔次のように説かれている〕如くである。

### §1. 十地と第十一地

観自在菩薩 (Avalokiteśvara-bodhisattva) は世尊に尋ねました。「世尊よ, 菩薩の

17) 「発心すること (prasthāna)」の一語は写本に現れるのみ。玄奘訳「撰決撰分」およびチベット語訳には存しない。

十地とは、即ち、(1) 歡喜 (pramuditā) と名づける地、(2) 離垢 (vimalā)、(3) 発光 (prabhākari) (4) 焰慧 (arciṣmatī) (5) 極難勝 (sudurjayā) (6) 現前 (abhimukhī) (7) 遠行 (dūramgamā) (8) 不動 (acalā) (9) 善慧 (sādhumatī) (10) 法雲 (dharmameghā) と〔名づける地〕であり、その第十一〔地〕が仏地 (buddhabhūmi) ですが、これらの諸地は、どれだけの清浄 (viśuddhi) と、どれだけの要素 (aṅga) で包括されるのでしょうか。」

## § 2. 四つの清浄

世尊は答えた。「観自在よ、これらの諸地は、四つの清浄と十一の要素で包括されると理解すべきです。§ 2-1. ここで観自在よ、初地は意志の清浄 (āśaya-viśuddhi) で包括されます。§ 2-2. 第二地は勝れた戒の清浄 (adhiśīla-viśuddhi) で、§ 2-3. 第三地は勝れた心の清浄 (adhicitta-viśuddhi) で、§ 2-4. 第四地より仏地までは、後々の〔地に至るほど〕より勝っている勝れた慧の清浄 (adhiprajñā-viśuddhi) で包括されると理解すべきです。それらの諸地は、これら四つの清浄で包括されるのです。」

## § 3. 十一の要素<sup>18)</sup>

「〔それらの諸地が〕どんな十一の要素で〔包括されるのかという〕と、

§ 3-1. 観自在よ、信解行地 (adhimuktīcaryā-bhūmi, 初地の前段階) において、十〔種〕法行 (dharma-carita) を〔行い〕、信解による忍 (kṣānti) をよく修習した菩薩は、その〔信解行〕地を超過して、菩薩の正性離性 (samyaktva-nyāma, 見道＝初地) に入ります。〔これで彼は初地の要素を獲得するのです。〕

§ 3-2. 彼は〔初地の〕要素を満たしてはいますが、微細な過失 (sūkṣma-āpatti) による誤り (skhalita) の現出 (samudācāra) を認知して行動する人 (saṃprajāna-cārin) になることができません。〔従って〕彼は〔第二地の〕要素を満たしてはいないので。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

18) このパラグラフについては、カマラシーラの『修習次第・初篇 (First Bhāvanākrama)』の中で、11の項目に従い、『解深密經』の文章に現れる言葉を用いつつ、それにカマラシーラ自身の言葉をつけ加え、長文を費やして解説されている。G. Tucci, *Minor Buddhist Texts*, Part II (Roma, 1958) pp. 224-228. 『修習次第・初篇』にかんする諸資料については、御牧克己「頓悟と漸悟—カマラシーラの『修習次第』」『講座・大乘仏教』第七卷(中観思想) pp. 233-235参照。なお Tucci ed., p. 228で『解深密經』の引用とされている一文は、引用ではなく、カマラシーラ自身の言葉である。ここでカマラシーラはこれに先立つ解説の主旨が『解深密經』に述べられていることを指摘しているにすぎないのである。

§3-3. 彼は〔第二地の〕要素を満たしてはいますが、完全なる世間的な三昧に精神集中し、完全なる聞持陀羅尼 (śruta-dhāraṇī) を獲得することができません。〔従って〕彼はこの〔第三地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-4. 彼は〔第三地の〕要素を満たしてはいますが、得られたままの菩提分法 (bodhipakṣya-dharma) をもって、その〔菩提分法に〕多くを費やし (bahulī-vihārin), かつ精神集中 (samāpatti) と法 (dharma) に対する渴愛 (tṛṣṇā) から心を解放することができません。〔従って〕彼はこの〔第四地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-5. 彼は〔第四地の〕要素を満たしてはいますが、〔四〕諦を觀察し、ただ一途に輪廻に逆行 (vimukha) し涅槃を志向 (abhimukha) する作意 (manaskāra) を捨て去り、方便 (upāya) に包括される菩提分法を修習することができません。〔従って〕彼はこの〔第五地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-6. 彼は〔第五地の〕要素を満たしてはいますが、諸行の働き (saṃskāra-pravṛtti) を正しく直視して (pratyakṣī-√kr), その〔諸行を〕厭うこと (nirvid) が多いので、無相作意 (animitta-manasikāra) に多くを費やすことができません。〔従って〕彼はこの〔第六地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-7. 彼は〔第六地の〕要素を満たしてはいますが、連続して (niśchidram) 絶え間なく (nirantaram) 無相作意に多くを費やすことができません。〔従って〕彼はこの〔第七地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-8. 彼は〔第七地の〕要素を満たしてはいますが、無相に止まること (animitta-vihāra) を享受 (ābhoga) して放棄することができず、相に対する自在性 (nimitta-vaśitā) に到達することもできません。〔従って〕彼はこの〔第八地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§3-9. 彼は〔第八地の〕要素を満たしてはいますが、同義語 (pariyāya) と定義 (lakṣaṇa) と語義解釈 (nirvacana) と語義区分 (prabheda) よりなるあらゆる種類の説法 (dharma-deśanā) に対する自在性を得ることができません。〔従って〕彼はこの〔第九地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。



§ 3-10. 彼は〔第九地の〕要素を満たしてはいませんが、完全なる法身(dharma-kāya)を現証(pratisam-√vid)することができません。〔従って〕彼はこの〔第十地の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。

§ 3-11. 彼は〔第十地の〕要素を満たしてはいませんが、一切の認識対象(jñeya, 所知)に対する執着なき(asaṃga) 障害なき(apratighāta) 知見(jñāna-darśana)を得ることができません。〔従って〕彼はこの〔第十一地(仏地)の〕要素を満たしてはいないのです。彼はその要素を満たすべく努め、そしてそれを獲得するのです。彼は〔仏地の〕要素を満たしたのです。この要素を満たしたが故に、彼はすべての要素を満たしたことになるのです。観自在よ、それらの諸地は、これら十一の要素で包括されるのです。」

#### § 4. 十地と第十一地の定義

「世尊よ、どうして初地が歓喜地と言われ、ないし、どうして〔第十一地が〕仏地と言われるのでしょうか。」

「§ 4-1. 大目的(mahā-artha)である未だ曾てない(anucita) 出世間心を得て、おいなる喜び(udāra-prīti)に歓喜するから、初地が〈歓喜地〉と言われるのです。

§ 4-2. 一切の微細なる過失と〔その〕束縛(daṣṭhūlya, 亀重)を離れているから、第二〔地〕が〈離垢〉と言われるのです。

§ 4-3. この〔地で得られる〕三昧と聞持陀羅尼が無限の智慧の光(jñāna-ābhāsa)を根拠としているから、第三地が〈発光〉と言われるのです。

§ 4-4. 煩悩を焼き尽くさんがため、この〔地で得られる〕菩提分法の修習が智慧の火焰(agni-arcis)となるから、第四地が〈焰慧〉と言われるのです。

§ 4-5. 極めて困難であるにもかかわらず(kṛcchreṇa), それらの菩提分法についての、その方便の修習(upāya-bhāvanā)に対する自在性があるから、第五地が〈極難勝〉と言われるのです。

§ 4-6. 諸行の働き(saṃskāra-anuvṛtti)を直視し、無相作意に多くを〔費やすこと〕が現前するから、第六地が〈現前〉と言われるのです。

§ 4-7. 連続して絶え間ない無相作意の中に遠く入り(dūra-anupraveśa), 清浄なる地(viśuddha-bhūmi)に隣接するから、第七地が〈遠行〉と言われるのです。

§ 4-8. 無相(animitta)を享受せず(anābhoga), 相の煩悩(nimitta-kleśa)の現出(samudācāra)に対して不動でいるから、第八地が〈不動〉と言われるのです。

§4-9. あらゆる種類の説法に対する自在性, すなわち完璧で (anavadya) 果てしない智慧 (mati-vaipulya) を獲得するから, 第九地が〈善慧〉と言われるのです。

§4-10. 虚空 (nabha) に喩えられる束縛の身体 (dausṛhulya-kāya, 龜重身) を, 雲に喩えられる法身 (dharma-kāya) があまねく (spharaṇāt) 覆うから, 第十〔地〕が〈法雲〉と言われるのです。

§4-11. 極めて微細な煩惱という障害 (kleśa-āvaraṇa, 煩惱障) と認識対象に対する障害 (jñeya-āvaraṇa, 所知障) を断じ, 執着もなく障害もなく, 認識対象のあらゆる形態 (sarva-ākāra) をさとりから, 第十一地が〈仏地〉と言われるのです。」

## §5. 二十二の愚痴と十一の束縛

「世尊よ, これらの諸地におけるどれだけの愚痴 (saṃmoha) と, どれだけの束縛 (dausṛhulya, 龜重) が対治されるべきもの (vipakṣa, 所対治) なのでしょうか。」

世尊は答えた。「観自在よ, 二十二の愚痴があり, 十一の束縛があって, 対治されるべきものです。」

「§5-1. 初地には, 法と人 (pudgala) に対する執着 (abhiniveśa) という愚痴, および悪趣の汚染 (āpāyika-saṃkleśa) という愚痴があり, それらによる束縛があって, 対治されるべきものです。

§5-2. 第二〔地〕には, 微細な過失による誤りについての愚痴, および種々なる業趣 (karma-gati) について愚痴<sup>19)</sup>があり, それらによる束縛があって, 対治されるべきものです。

§5-3. 第三〔地〕には, 欲貪 (kāma-rāga) についての愚痴, および完全なる聞持陀羅尼について愚痴があり, それらによる束縛があって, 対治されるべきものです。

§5-4. 第四〔地〕には, 精神集中に対する渴愛についての愚痴, および法に対する渴愛について愚痴があり, それらによる束縛があって, 対治されるべきものです。

§5-5. 第五〔地〕には, ただ一途に輪廻に逆行することに対する作意についての愚痴, およびただ一途に涅槃を志向することに対する作意について愚痴があり, それらによる束縛があって, 対治されるべきものです<sup>20)</sup>。

§5-6. 第六〔地〕には, 諸行の働きを直視することについての愚痴, および相が

19) 漢訳四種はすべて写本の読みと一致するが(無論訳語は異なる), 「撰決訳分」および『解深密経』のチベット語訳では, それぞれ「法に対する愛という愚痴 (chos la sred pa kun tu rmoṅs pa, (90b<sup>8</sup>-91a<sup>1</sup>))」「種々なる業の異熟についての愚痴 (Lamotte ed., p.127)」とあって他と異なる。

多く現出することについて愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

§5-7. 第七〔地〕には、微細なる相の現出についての愚痴、およびただ一途に無相を作意する方便について愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

§5-8. 第八〔地〕には、無相を享受することについての愚痴、および相に対する自在性について愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

§5-9. 第九〔地〕には、〔四無礙解、すなわち〕(a) 無限の説法 (dharma-deśanā), (b) 無限の法の句 (dharma-pada) と文字 (vyamjana), さらに後続の(c) 智慧 (prajñā) と(d) 弁才 (pratibhāna) における陀羅尼の自在性についての愚痴、および弁才の自在性について愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

§5-10. 第十〔地〕には、偉大なる神通力 (abhijñā) についての愚痴、および微細なる秘密 (sūkṣma-guhyā) に入っていくことについて愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

§5-11. 第十一〔地〕には、あらゆる認識対象に対する極めて微細な執着 (sakti) についての愚痴、および障害 (pratighāta) について愚痴があり、それらによる束縛があって、対治されるべきものです。

観自在よ、これら二十二の愚痴と十一の束縛によって、それらの諸地の取り決めがあるのです。無上のさとりは〔これらの愚痴と束縛より〕離れたもの (viśamyukta) なのです。」

「世尊よ、今そこで菩薩たちが、巨大な愚痴の網 (saṃmoha-jāla) を破り、巨大な束縛の深み (dauṣṭhulya-gaḥana) を超過して、無上のさとりを悟るところの、〔その〕無上のさとりは希有なるもの (āścarya) であり、ないし、大いなる称赞を有するもの (mahā-anuśaṃsa) であり、大いなる果実を有するもの (mahā-phala) です。」

## §6. 八つの勝れていること<sup>21)</sup>

「世尊よ、どれだけの勝れていること (viśeṣa, 殊勝) によって、それらの諸地の取

20) 「摂決摂分」および『解深密経』の玄奘訳は、筆者のテキスト再構成に一致するが、他の資料はすべて 'saṃsāraikāntavimukhatābhimukhatāmanaskārasaṃmoho nirvāṇai-kāntvimukhatābhimukhatāmanaskārasaṃmohas taddauṣṭhulyaṃ ca vipkṣaḥ' という原文を前提にして訳されているようである。

り決めがあるのでしょうか。」

「観自在よ、八つ、すなわち、(1)勝れた意志の清浄 (adhyāśaya-viśuddhi)、(2)心の清浄 (citta-viśuddhi)、(3)悲の清浄 (karuṇā-viśuddhi)、(4)波羅蜜の清浄 (pāramitā-viśuddhi)、(5)仏陀を見て供養することの清浄 (buddha-darśana-upasthāna-viśuddhi)、(6)衆生を育むことの清浄 (sattva-paripāka-viśuddhi)、(7)生まれることの清浄 (upapatti-viśuddhi)、および、(8)威徳の清浄 (prabhāva-viśuddhi)〔の勝れていること〕によってです。」「観自在よ、初地においては〈勝れた意志の清浄〉より〈威徳の清浄〉までが、ないし、後続する諸地より仏地においても〈勝れた意志の清浄〉より〈威徳の清浄〉までがありますが、それらは〔後々の地に行くにつれて〕より清浄なもの (viśuddhatara)、最も清浄なもの (viśuddhatama) となると理解すべきです。ただし仏地においては〈生まれることの清浄〉を除きます。また〔これらの八つの勝れていることの〕初地における功德 (guṇa) と、それに続く諸地の、それらの〔地の〕功德は同じものですが、自分自身がいる地の功德が勝れていると理解すべきです。菩薩の十地すべての功德にはさらに上がありますが (sottara, 有上)、仏地の功德にはもはや上がない (niruttara, 無上) と理解すべきです。」

## 最後に

唯識派 (瑜伽行派) の基本典籍と見なされる『瑜伽論』および『解深密経』については、先学による数多くのすぐれた研究があり、筆者がここで特につけ加えることはない。ただ、そのタイトル 'Saṃdhinirmocana-sūtra' が示すように『解深密経』は、仏陀によって説かれた過去の教説の隠された意図 (saṃdhi, 深密) を、あたかも、もつれた糸の結び目を解きほぐす如く明らかにする (nirmocana, 解) 経典であるが、無論これは、未だ説かれてはいない唯識派の思想を、仏説の権威に跡づけようとしたものである。しかし、経典を文字通りに読むのではなく、その裏にあると称する、それを読む側の意図があたかも仏説のごとくに認められてしまうのであれば、仏教経典はどんなことでも説いていることになりかねない。そのような点で、『解深密経』の登場を、正真正銘の解釈学をインド仏教思想史に持ち込んだ経典とみて、その危険な側面を明

21) ラモットはこのパラグラフの表題を「八つの清浄 (Les huit Viśuddhi)」としているが、正確に言えば、清浄 (viśuddhi) という点で勝れていること (viśeṣa) が八項目にわたって示される。従って、先のテキスト中に用いたラモットの表題に従わず、このように変更した。

らかにした駒沢大学の袴谷憲昭教授の近著の重要性だけはここで指摘しておきたいと思う<sup>22)</sup>。神秘主義とは決別したはずの釈尊の思想が、唯識派の隆盛に至ってますます骨抜きにされ、仏教をインド本来の習慣に押し戻してゆく一端を唯識派が担ったのなら、唯識思想研究においても、仏教の原理・原則に照らして、それが果たして仏教に値するかどうかを常に意識してゆかねばならないのは当然のことである。

ともあれ本稿で示した一葉の写本断片を通して、インド仏教研究の資料という点では重要な『瑜伽論』および『解深密経』のオリジナルが、漢訳（大正蔵経）にして一頁半ほど回収されたことにはなるのである。

(1994年12月20日)

---

22) 袴谷憲昭『唯識の解釈学：解深密経を読む』（春秋社，1994）